

## 四旬節第二主日

2015.3.1

マルコ 9・2-10

今日四旬節第二主日のミサの福音はイエスのご変容の場面です。何故、どのような意味で、四旬節の主日のミサで、このイエスのご変容の場面が朗読箇所として選ばれているのでしょうか。今聴いた聖書の箇所からだけでは、その疑問に対する答えを見つけることは難しいかもしれません。天からの光に包まれて、モーセとエリヤに囲まれて立つイエスの栄光のお姿は、四旬節の間わたしたちが目を向ける十字架のイエスのお姿とは相矛盾しているように思えます。しかし、まさにこの点にこそ、四旬節のミサの典礼の中で、このご変容の場面がクローズアップされる理由があるのだと思います。

そう考えて、あらためて聖書を開いて、今日の変容の場面の直前にある記事を読み直してみると、「イエス、死と復活を予告する」という見出しがあつて、イエスは「ご自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」と教え始められたということが語られています。

そんなエルサレムに向かう道の途中での出来事として、今日の福音はイエスのご変容の出来事をわたしたちに語るのです。福音書の意図は明らかです。その意図とは、十字架の死に向われるイエスとはどのようなお方であり、そのイエスはどのようにして、十字架の死に至るご自分の運命の道を受け入れ、選び取ることが出来たかということ、わたしたちに思い起こさせようとしているのです。

今日の福音の箇所に戻って、わたしたちもあの三人の弟子たちとともに、光り輝くご変容のイエスのお姿に目を向けたいと思います。イエスの全身を包む光はどこから出ているのでしょうか。それは、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」とイエスに向かって語りかけられる父なる神の子としてのイエスの、いわば、神性そのものの、この世ならざる輝きと言えるでしょう。しかし、それはまた、「これは、わたしの愛する子、わたしの心にかなう者」という父なる神のみことばが示しているように、十字架の死に至るまで徹底的に父なる神のみ旨に従い通された人間としてのイエスの、澄みきった心のありようから発する光でもあるとも思われます。だからこそ、父なる神のみことばはわたしたちに向けて、イエスの光り輝くお姿を指し示しつつ、「これに聞け」と呼びかけておられるのではないのでしょうか。

このご変容の場面に響く、「これに聞け」という父なる神のみ声は、イエスのどのようなおことばにわたしたちが耳を傾けることを促しておられるのでしょ

うか。それは、イエスの数あるおことばの中でも、とりわけ、このご変容の出来事をはさむように繰り返されている、ご自分の受難の死と復活とを告げるイエスのおことばであると言えるのではないのでしょうか。そのように受け止めることによって、今日のミサの福音のイエスのご変容の場面が、何故四旬節の主日の福音として選ばれているかを理解することが出来ると思います。

四旬節は主イエスがたどられた十字架の死に至る苦難の道行、そしてそれをもって全てが終わるのではない、復活に至る主イエス・キリストによってもたらされた過越の道のりを記念し、そこにわたしたちの心に向け、年毎に新たにそれを私たちの心に焼き付けるための、教会の一年の典礼の暦の中の特別な季節です。

わたしたちがカトリックの教会と出会って受け入れ、選び取ったカトリックの信者としての信仰は、教会が年毎に四旬節から復活祭の典礼によって記念するイエス・キリストによってもたらされた過越、イエスがたどられた十字架の死から復活にいたる出来事に基づいています。わたしたちが信じている信仰によれば、イエス・キリストはこの世に生きる、わたしたちのために自らを十字架の死に渡し、わたしたちをそこへと導くために神の永遠の命へと復活された、人となられた神の子であり、そのことによってわたしたちに神からの救いをもたらしてくださったわたしたちの救い主です。今日の福音はそのようなイエス・キリストの真のお姿をわたしたちにも垣間見させてくれます。

今日の福音に示されているご変容の光は、十字架に向かって進んで行かれるイエスのうちから輝き出て、イエスを包む光です。あのご変容の場面に立ち会うことを許された三人の弟子たちのように、わたしたちもこのような世の中にあって、イエス・キリストへの信仰によって生きるために、その光を必要としています。けれども、このイエスを包む光と一体となるためには、ペトロがそうしようと思ったように、その光の中にとどまることを願って、そこに庵を建てることによるものではありません。イエスの歩まれた道につき従って、イエスがわたしたちを導こうとしている復活の栄光の光に達する道は、イエスご自身の口からはっきりと示されています。ご自分の十字架の苦難への道を予告されたイエスは、それに続いて、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言っておられます。

この世におけるわたしたちの生は、それがこの先どのようなものになろうとも、わたしたちに先立って、この世の十字架の道を歩み通された、主イエスに従う道であり、わたしたちの前には、この世に生きるわたしたちの十字架をも背負って進んでくださる主イエスがいてくださるのです。わたしたちがこれから経験するであろう全てを、それをはるかに上回る仕方で経験された、わたしたちの先達としてのイエスがいてくださるのです。わたしたちが自分の心

の中にこの信仰を保持できるとき、わたしたちも、イエスの内から輝き出てイエスを包んだあの光を自らの内に見出すことが出来ることでしょう。そのような境地がありうることを信じ、そのような境地に少しでも近づくことが出来るように、この四旬節のときを十字架の道を全うされたイエス・キリストを救い主として信じる者たち同士として、ともに支え合いながら歩んで参りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高